

記憶の品をたどって

tadotte@asahi.com

3

6枚のカードが砂のついたケースに入っている。美容室やりサイクルショップ、婦人服店の会員証などのようだ。

「伊東牧子」という名前が読める。これなら持ち主が見つかるかもしれない。

被災地支援を続ける前橋市の元高校教諭、堀泰雄さん(75)がこのカードケースを見つけたのは、2012年12

月。岩手県陸前高田市の市街地にあった大型スーパーの近くだった。

持ち主を捜して、美容室を当たる。店は被災しており、



市内や隣の大船渡市の系列店に問い合わせたが、データはないという。リサイクルショップは電話が繋がらない。被災前の住宅地図を見ると、このあたりは「伊東」という姓が多い。陸前高田商工会長で文具・書店を経営する伊東孝さん(63)の仮設店舗を訪ねた。店の女性が昔の電話

カードケースは戻ったけれど

帳から、「伊東まき子」という女性が大船渡市寄りの災害公営住宅の近くに住んでいた、とつきとめてくれた。名前が微妙に違うが、早速行くと、「まき子先生」にた



見つかったカード。市街地では大規模なかさ上げ工事が進む＝岩手県陸前高田市

どり着いた。元小学校の先生で、いまは盛岡市に住んでいるという。近所の女性が知っていて、電話してくれた。

「まき子先生」は電話の向こうでいった。「私じゃなくて、おもちゃ屋の娘さん。でも……」

伊東牧子さんは震災前に亡くなったという。

母親が別の災害公営住宅に住んでいることがわかった。

伊東東さん(93)だ。訪ねてカードケースを見てもうと、東さんは砂を拭い、表面の文字をじっと見つめた。

東さんは20年ほど前まで、カードケースが見つかったスーパー近くの玩具店を夫婦で営んでいた。次女の牧子さんは東京の短大を出て新宿の百貨店に勤め、主に紳士服売り場を担当した。だが病気で震災の5年前に故郷に戻り、治療を続けながら、スーパー2階の洋品店で働いた。

力尽きたのは09年2月。58歳だった。三回忌の翌月、一帯が津波にのまれた。

東さんは家族に支えられて避難したが、友だちや家、飼った猫を失った。

「津波からもう10年かな」――まだ6年です。

「家族のアルバムがあれば、めくって時間をつぶせるのに……」

次女の持ち物で戻ってきたのは、今回のカードケースぐらいだ。自宅に置いていたのか、あるいは勤めていた洋品店に残っていたのか。

市街地は、標高約9～12メートルまでかさ上げされる。総延長約3キロのベルトコンベヤーで運ばれた土砂の高台が現れた。昨春秋、高台で商業施設の建設が始まった。

先に紹介した文具・書店経営の伊東孝さんは、市街地再生の先頭に立つ。震災後、再建を迷う時間はなかった。4月下旬の学校再開に向け、トラック3台で教科書が届いた。取次店だったからだ。すぐに営業を再開した。市内の仮設店舗第1号だった。

高台造成を待ちきれずに、別の地で住宅や店舗を再建する人も多い。孝さんはいく。「街になるには何十年もかかるかもしれない。でも次世代のためです」(山浦正敏)

高台造成を待ちきれずに、別の地で住宅や店舗を再建する人も多い。孝さんはいく。「街になるには何十年もかかるかもしれない。でも次世代のためです」(山浦正敏)